

主論文要約

世界における男子プロテニス界の構造と

日本人選手の強化策

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科

坂井 利彰

1. 研究の目的

これまでの研究活動で、大学という環境から世界で活躍するトップテニスプレイヤーを育成するための指導方法の検討を行ってきた。しかしながら、現場で指導する経験を通じて、ジュニア時代から世界を転戦していた「早熟」といえる選手と、大学への進学を選択した「晩成」といえる選手との間にある高い壁の存在を認知せざるを得なくなった。実際、テニスの一流選手として活躍する大多数の選手が、ジュニア時代から急速にランキングを上昇させた「早熟」と呼べる選手であり、徐々にランキングを上昇させた「晩成」と呼べる選手たちは、「早熟」な選手のランキングを上回ることが難しいという現状がある。一方で、ほとんどの日本人選手は「早熟」な選手として活躍することは難しく、「晩成」することを目指す選手である。本研究の目的は、トップ100位に入る日本人晩成型選手を継続的に輩出できるような強化指針を構築することにある。

強化指針を構築するという目的を達成するにあたり、その過程においてそれは以下のいくつかの目的に細分化される。本稿の第2章では、まず、トップテニスプレイヤーを対象に、100位にランクインした年齢に基づいて「早熟型」または「晩成型」に分類する。その後、ランキング、試合内容、出場大会などの項目に関して、早熟型と晩成型の比較分析を行うことで、漠然としたものでしかなかった「早熟」な選手が強い」という事実を明確なものとするとともに、なぜそのような現象が起こるのかを構造的に明らかにする。さらに、その構造を踏まえた上で、早熟型の選手と晩成型の選手が、いかに

してランキングを段階的に上昇させていくべきかを検討する。従って、選手が男子プロテニスツアーの持つ構造の特性を理解し、さらにその構造の中で自己の位置づけを把握することで、達成すべき目標を明確にし、選手としてのキャリア形成の一助となるようなデータの作成を行うことがここでの目的である。

第3章では、個別の選手を取り上げ、東アジアの晩成型の選手が、特に出場大会グレードの選択において、とるべき戦略を明らかにする。

特に晩成型の選手は、グランプリ大会とチャレンジャー大会という2つのグレードの間で出場大会の選択に迫られる。この男子プロテニスツアーのグレードこそが早熟型に有利に働く構造そのものである。東アジア出身という身体的・地理的な特性を持った選手について、ランキングの変動と出場大会のグレードがいかんにして関連しているかを明らかにする。また、そのようなランキングや出場大会の変動が起こった背景を、ヒアリングを通して明らかにする。従って、男子プロテニスツアーの構造に基づいて選手が達成すべき目標が明確になった時に、その目標を達成するためには、大会グレードの選択においていかなる戦略をとるべきかを明らかにすることが、ここでの目的である。

第4章では、これまでの分析を踏まえた上で、構造的に不利な立場にいる、日本人晩成型選手が男子プロテニスツアーでとるべき戦略を検討する。

選手がとるべき戦略に加えて、選手を取り巻く環境の整備としてテニス関係者が取り組むべき課題を明確にする。

第4章をもって、日本人晩成型選手の強化策とする。

2. 男子プロテニスツアーの構造

男子プロテニスツアーの構造的な特性を明らかにした。まずランキング100位にランクインした年齢別に選手をグループ化し、それぞれのランキング推移を求めた結果、100位にランクインした年齢（100位到達年齢）が低いほど、その後のランキングが高い順位に到達する傾向が明らかになった（図1）。

この特徴は、特に100位到達年齢が20歳以下の選手において顕著であり、100位到達年齢がその後の選手の最高ランキングを決めてしまう影響力を持っていることを示唆する。また、この100位到達年齢が20歳以下の選手は、一度トップのランキングまでたどり着くと、そのままランキング上位に留まり続け、その後も27歳程度まで下降することはほとんどない。一方で、100位到達年齢が21歳以降になると、その年齢に応じて最高ランキングにもはっきりとした差があるようには見受けられず、最高ランキン

グに達した後もランキングを維持するというよりは、逆V字型を描くようにランキングを下げる。そして、100位到達年齢が20歳の推移と21歳の推移とでは、最高ランキングにおいて明確な差異があった。つまり、20歳までに100位にランクインできるか否かをひとつの境界線として、その後のランキングがはっきりと分かれるのである。以上の結果から、100位到達年齢が20歳以下の149人の選手を「早熟型」、21歳以上の292人の選手を「晩成型」とした。

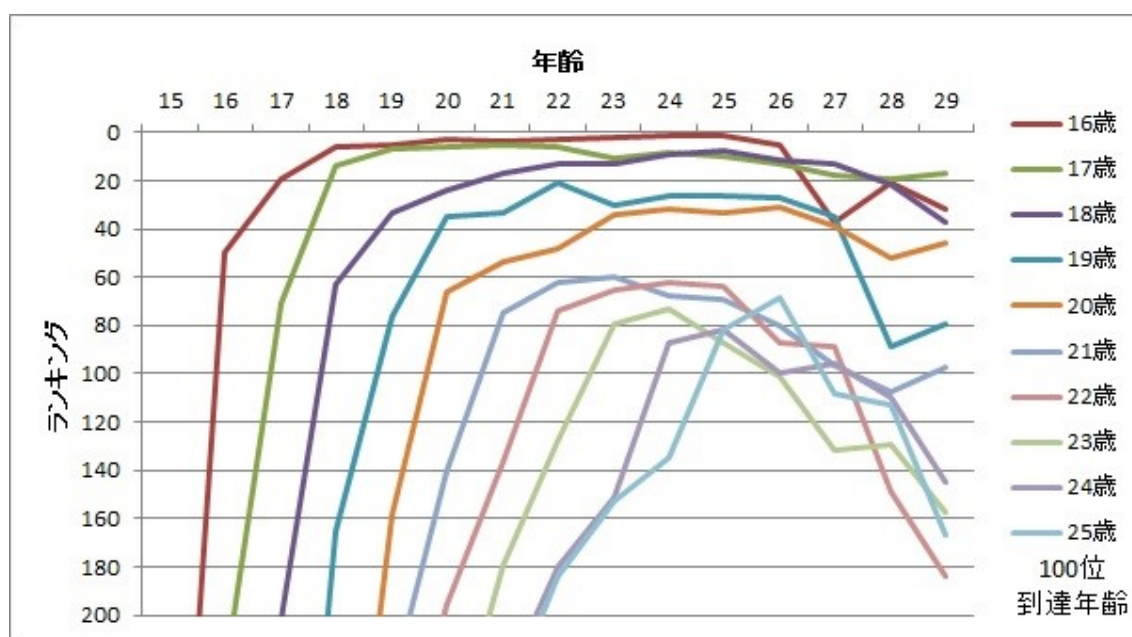


図1 100位到達年齢別ランキング推移

次に、ランキング、試合内容、出場大会に関して、早熟型と晩成型の比較分析を行った。その結果、自己最高ランキングと年齢別ランキング共に、「早熟型」が「晩成型」よりも圧倒的にランキングが高いことが明らかになった。その要因として、ATPポイント制度やワイルドカード制度といった男子プロテニスツアーのシステムが、早熟型に対して有利な構造であることが挙げられる。早熟型はグランプリ大会のワイルドカードを獲得することで、若い時期からからグランプリ大会本選に出場し、効率的なATPポイントの獲得と、レベルの高い相手と対戦することによる技術力向上の双方を、実現する機会を得ていた。そして、結果としてグランプリ大会に本選から出場できるランキングにまで到達することが比較的容易であり、グランプリ大会でATPポイントを大きく獲得し

続けることでそのランキングは維持される。一方で晩成型は、早熟型のように一気にランキングを上昇させる機会も実力もないため、グランプリ大会予選やチャレンジャー大会に出場する必要があり、グランプリ大会に本選から出場できるランキングまでたどり着くまでに時間がかかる。早熟型はトップ選手だけが入ることのできる、好循環の中でトップランキングを独占する。構造的に不利な立場にある晩成型は、そのような早熟型に対抗することは難しく、生涯成績においても早熟型のランキングを超えられない。

3. ランキング推移表

男子プロテニスツアーの構造の存在は、目標とするランキングに到達するためには、加齢に応じて段階的にランキングを上昇させることが重要であることを示唆する。

そこで、773名の選手の年齢に応じたランキング推移に基づき、各年齢時のランキングに応じた目標ランキングへの到達率を網羅的に求め、ランキング推移表を作成した（表1）。

そのランキング推移表において、日本人晩成型においては到達ランキング100位および50位に関するものが重要になるが、それらにおいて区切りとなったのは、19歳、22歳、25歳であった。特に22歳時においては1段階上のランキングに達する割合が50%前後であるのに対して、2段階上の到達ランキングに達する割合はほとんどのグループで20%未満に留まり、22歳の時点で、選手の限界と可能性がおおよそ予測できることになる。22歳時に300位にランクインしていない選手が今後100位にランクインする割合が17%以下であるという事実は、大学卒業後にプロに転向するか否かを判断する基準にもなり得る。

また、到達ランキング30位のランキング推移表をみると、20歳までに100位にランクインできなかった時点、すなわち早熟型になれなかった時点で30位に到達する割合が大幅に減少することも明らかになった。

さらにアジアの晩成型選手に限定すれば30位に到達した選手がひとりもないのが現状であり、日本人晩成型選手が30位にランクインすることが極めて困難であることを示唆している。

4. 晩成型選手の限界と可能性

早熟型の選手たちは、10代の前半にジュニアトーナメントでジュニアタイトルを獲得し、有力なエージェントから才能を見込まれ、恵まれた環境を手に入れる。そして、男子プロテニスツアーの構造そのものまでもが、早熟型に有利なシステムであった。一方で、晩成型は自らの時間と労力を削って、練習環境と資金を手に入れなければならない。早熟型は才能（チャンス）を始めから備えていることが前提であるのに対して、晩成型は地道な努力によってそのチャンスを作っていかなければならないのである。早い段階でトップ30位にランクインする早熟型は、早熟型同士において相手に勝つ戦いである。大会選択の戦略を練りながら地道にATPポイントを獲得していかなければならない晩成型は、男子プロテニスツアーの構造そのものが相手であり、ATPポイントを獲得する戦いである。そのような状況にあって、地道にランキングを上昇させてきた晩成型が、早熟型に勝利して30位以内にランクインできるかという、「難しい」と言わざるを得ないというのが現実だと考えられる。

一方で、晩成型選手の可能性を示すデータもある。トップ100位選手の平均年齢は、年々上昇している。この平均年齢の上昇は、特定の早熟型の選手が上位のランキングに長年居座り続け、彼らの年齢上昇とともに平均年齢の上昇が起こっているという現象であった。一方で、晩成型の平均年齢の上昇は、早熟型と比較したときはかなり控えめであり、早熟型よりも晩成型は選手の入替わりがあり、多くの選手にチャンスがあることを示している。さらに、100位に占める早熟型と晩成型選手の割合は2004年からの10年間で、晩成型の割合が徐々に増えていることから、早熟型への新規参入が難しい環境になってきていることを示している。

5. 東アジアの晩成型選手のケーススタディ

東アジアの晩成型4選手を取り上げ、早熟型の優位性を踏まえたときに、男子プロテニスツアーのスケジューリングにおいていかなる戦略をとるべきかを検討した。晩成型選手は、対戦相手のレベルが高く獲得ATPポイントが多いグランプリ大会に出場するか、レベルが低く獲得ATPポイントも少ないチャレンジャー大会に出場するかの選択は重要な戦略のひとつである。東アジアの晩成型4選手のケーススタディの結果、ATPポイントを獲得しているのはチャレンジャー大会であり、グランプリ大会への出場数を増やすことはランキングを落とすきっかけとなっていることが明らかになった。グラン

プリ大会の方が獲得できる ATP ポイントの最大値は大きいものの、チャレンジャー大会の方が安定して ATP ポイントを稼げるため、平均してみればグランプリ大会よりもチャレンジャー大会の方が多くの ATP ポイントを獲得することができる。従って、晩成型の選手は、グランプリ大会本選から出場できるランキングに達した時点でグランプリ大会を主戦場に切り替えてしまうのではなく、100 位にランクインした後もチャレンジャー大会に集中して出場し ATP ポイントを地道に積み上げることが重要である。

仮に 30 位へのランクインを目指すのであれば、グランプリ大会で ATP ポイントを大きく獲得することも必要になるが、50 位にランクインするという目標であれば、チャレンジャー大会に集中して出場していても達成することができる。

東アジアの晩成型選手にとって 30 位以内にランクインすることが極めて困難であることは、ランキング推移表から明らかになっている。

このチャレンジャー大会重視の選択は、早熟型の優位性を認め、早熟型のランキングである 30 位にランクインすることを「諦める」ことで、晩成型選手としての成功を確実なものとするための戦略である。

6. 日本人晩成型選手の強化策

男子プロテニスツアーの構造と、東アジアの選手のケーススタディを踏まえ、さらに補足的な計量分析を加えることで、日本人晩成型選手の強化策を提案した。それは選手個人としてとるべき戦略と、日本のテニス関係者全体が“チーム日本”として取り組むべき課題とに分けられる。

6-1 選手の戦略

日本人晩成型選手の身体的特性、地理的特性、そして男子プロテニスツアーの構造を考慮したとき、アジアのハードコートのチャレンジャー大会に集中して出場することが最も効率的な ATP ポイント獲得方法である。今回対象とした日本人選手は全員 180cm 以下であったが、世界全体で見たときに身長が 180cm 以下の選手は 181cm 以上の選手よりもランキングが低く、グランプリ大会よりもチャレンジャー大会に数多く出場することで 100 位にランクインしていることが明らかになった。また、コートサーフェスでいえば、世界全体でみるとクレイコートが 50% でハードコートが 44% を占めているが、アジアに限定するとハードコートの割合が約 91% を占めているという現状がある。

さらにアジアの選手は、クレイコートと比較したときハードコートでの一大会の獲得 ATP ポイント数が極端に多く、ハードコートを得意とする特性もある。そして、アジアは欧州以外の地域に比べれば大会数も多く、各大会グレードが占める割合もバランスがとれている。

テニスは対人スポーツであり、高い技術レベルの選手と対戦機会を得ることで経験や技術力を向上することができると考えられている。だからこそテニスの中心地である欧州まで資金と時間をかけて遠征し、ATP ポイントを獲得できない可能性があるにも関わらずグランプリ大会に出場することが推奨される気風がある。しかしながら身体的に小柄であり、地理的に欧州から遠く離れた日本人晩成型というあらゆる意味で不利な立場にある選手にとって、そこに挑戦するリスクはあまりに大きい。

それは、ケーススタディにおけるグランプリ大会に出場することのリスクと相まって、日本人晩成型選手はアジアのハードコートのチャレンジャー大会に集中して出場し、ランキングを落とさない範囲においてのみグランプリ大会に出場することが最も現実的な強化策だと考える。

そして、日本の晩成型選手はランキング推移表に基づいて 19 歳、22 歳、25 歳という区切りにおいて、ランキングの短期目標を設定すべきである。

長期目標を 100 位へのランクインとする場合、19 歳までに 500 位にランクイン(100 位到達割合 59%)し、22 歳までに 300 位にランクイン(同 53%)すべきであり、25 歳までに 100 位に到達できないとその後の到達割合は 25%以下となり困難である。

この短期目標を達成できる場合のみにおいて、ATP ポイント獲得のための大会選択から実力向上のための大会選択に切り替えれば、ランキングと実力双方の安定した向上が期待できる。

6-2 “チーム日本”の戦略

最後に、“チーム日本”として日本のテニス関係者が取り組むべき課題として、各国の育成モデルの採用、ナショナルトレーニングセンター(NTC)の機能強化、国際大会の自国開催の3点を提案した。各国の育成モデルでは、特にアメリカの大学における育成システムを例にとり、ジュニア期とプロ選手との間に大学を据えることでプロとして転戦するための身体、精神面での準備を行い、セカンドキャリアまで見据えることの重要性を述べた。NTCの機能強化では、日本には世界トップランキングを経験した指導者が不在であることから、世界のトップを経験した欧米の選手(指導者)をNTCの強化責任者として招聘することで、NTCが世界のテニスと日本とのハブ機能を担うべきであるこ

とを述べた。国際大会の自国開催については、日本はテニスの中心地である欧州と距離があるために、移動による選手の負担を軽減し、ワイルドカードなどで優遇できる自国でのチャレンジャー大会の開催を増やす取り組みを行うべきであることを主張した。同時に近年チャレンジャー大会の開催数を急増させている中国などのアジア諸国と連携して、アジア全体として欧州に対抗できる環境整備を行っていくべきであるとした。これらは一貫して、日本人選手にとって負担の少ない日本を本拠地とすることの重要性と、その上で海外、特にテニスの中心地である欧州からの情報を入手し“世界のテニス”とのつながりを保ち続けるべきであることを主張している。

参考文献

- 1) 坂井利彰. 男子トップテニスプレイヤーの育成モデルに関する研究—世界ランキング 100 位以内日本人選手の大学における育成—. Master's thesis, 早稲田大学, 2007.
- 2) 坂井利彰, 坂井紗恵. トップテニスプレイヤーにおける「早熟型」と「晩成型」の比較分析. Keio SFC Journal, 9(2):101-112, 2009.
- 3) 坂井利彰. 日本人のテニスは 25 歳過ぎから一番強くなるなぜ世界と互角に戦えるようになったのか. 東邦出版, 2014.